

所 報

No. 15

佐賀県立教育研究所

も く じ

- ・ 研究所二十年を顧みセンターに夢を託す ————— 所長 山中 久雄 (1)
- ・ 昭和47年度は、こんな研究をすすめています ————— (3)
- ・ 教育現場と学校教育の現代化に思うこと ————— 伊万里中 昌山孝郎 (4)
- ・ 昭和47年度 教育評価研修会案内 ————— 所員 香月 和男 (5)
- ・ 研究紀要の紹介 ————— (6)
- ・ 昭和47年度 研究指定校の紹介 ————— (8)
- ・ あとがき ————— (8)

研究所二十年を顧み

センターに夢を託す



所 長 山 中 久 雄

全国的にみても教育センター(仮称)の建設はほぼ完了しているようであるが、本県教育委員会は、この数年間、センターの敷地を求めて、適地を物色し、地主との話し合いを進めてきたが、あいにくまとまらず、いたずらに時をすくしてしまっただが、今回は関係者の特別のご配慮により、長年の懸案だった敷地購入費が予算化され、現在地元と折衝を続けているところである。土地の購入が終わりしだい、整地造成と建築の委託設計をすませ、明年の今ごろは建築工事が進められる状態にまでこぎつけていきたいと考えている。もし予定通り事が運べば、教育研究所の存在は今年が最後になるであろう。

この教育研究所は今から20年前、昭和27年4月に、元の佐賀高等学校南校舎(旧成美高女)の一角に開設されたもので、その後、旧町村会館内とか、旧県立図書館内等に転々として移り住み、昭和41年に再び成美高女跡にある第一総合庁舎に移転してきたのである。

この20年間を顧みると、教育界にも大きな変化が幾たびか起こり、その都度いろいろの問題が提起され、研究所として取り組むべき課題も多かったように思うが、規模も小さくその機能を十分に発揮し得たとはいえない。したがって、夢を来たるべきセンターに託し、研究所の歩いてきた過去をふりかえって、その概要を記すこともあながち無益ではないであろう。

いったい各県は、いつごろから教育研究所を設置しはじめたのだろうか。また、その必要性はなんであったのだろうか。全国的にみると、昭和22年にすでに京都府と、兵庫県がまず設置して、その翌年に香川、島根、山梨等の各県が開設している。当時は、まだ戦後の混乱期にあり、教育界では戦前の中央集権的教育を大幅に改正し、教育行政の民主化と、教育の地方分権化を確立しようとしている時であり、これらの府県は、この時点において教育界の動向を予見し、教育研究所の設置にふみきったようである。戦後の教育は、戦前の教育とまったくその目的も内容も異なり、いわゆる社会科を中心とした経験主義的教育が全国を風びしていたのである。これはこどもたちの生活経験の発達段階に即して、その地域の社会生活の問題をとりあげて学習させ、こどもたちの手で解決の糸口をみつめていくという教育活動であり、平和的で民主的な人間形成をめざしたものであった。しかも、「何をどう教える」かは、まったく学校や教師にゆだねられ、地域や児童の実態に即して、それぞれ思い思いにカリキュラムを編成しなければならなかった。したがって、各府県においては、教育理念の一変した諸問題の基礎的な調査研究とともに、各地域の学校のカリキュラム編成の調査研究の助言の必要に迫られ、戦後の苦しい財政の中で教育研究所の設置を急いだと思われる。

本県では、昭和25年の税制の改正によって、県財政はしたいに苦しくなり、教育委員会の組織の拡大は困難な情勢にあったが、昭和27年に兼務の所長を含めて所員わずか4名という小規模のものであったが、ようやくその誕生をみたのである。

当時の研究事業をみると、やはり教育界からの強い要請によると思われる各教科の原基底カリキュラムが作成され小・中・高の各学校に配布しているようである。また、戦後はじめて実施された高等学校の男女共学に関する問題をとりあげ、教育界の新たな動きに対処して研究を進めてきた。

しかしながら、県財政は窮迫し、わずか3年を過ぎた昭和30年には、赤字財政のきりぬけ策として、研究所閉鎖もやむなしという声が聞かれるようになり、その前途がやぶまれたのであるが、さいわい関係者のご理解によって閉鎖のうき目はみずにすんだのである。(しかし、昭和32年には、佐教組事件が起こるといふ苦しい財政状態にまで追い込まれてしまったのである。)

ところで、昭和20年代の後半からの全国的な教育界の動きを見てみると、全国を風びした例のコア・カリキュラム運動も、学者・文化人・研究団体あるいは父兄から「いまわの教育活動」とか「体系的知識や科学的認識能力は育成されない」とか、あるいはまた、「児童生徒の学力は著しく低下している」といふ批判を浴びることになったのである。さしも盛んであったコア・カリキュラム運動もしだいに下火となり、昭和26年には、学習指導要領が大幅に改訂されることになったのである。

次に台頭してきた教科中心の教育課程は、各教科の背後にある学問としての論理的な系統性を重視し、こどもの科学的認識能力を高め、系統だった学力を身につけさせようと意図したものであった。各教科の論理的な発達段階に即し、かつ児童生徒の実態に応じた教材配列はいかにすべきかなど、学習指導要領の改善と、教育課程に関する方策の樹立を図り、教育環境の整備充実を図るため文部省は昭和31年から全国的な学力調査を始めた。これはその後数回行なわれたが、反対批判の声が高まり、また一応の目的を果たし得たということから昭和41年には打ち切られたのであった。

この間の、昭和33年に再び学習指導要領が改訂されることになった。当研究所においても、本県の学力調査の分析・検討を進め、そのつど研究紀要を発表した。その中で学力の東高西低型の実態を公表して話題をまいたこともあったが、概して本県の児童生徒の成績は全国的にみても、九州平均からみても、必ずしも良い成績とはいえない状態にあったのである。この調査結果をもとにして、教育内容方法について、あるいは教育環境の整備についての研究を全国的な組織を作って取り組むべきであったが、それができなかったことはまことに残念であった。体系的な知識の理解、科学的な認識能力の育成を標ぼうして進められた教育を評価し、検討するため、われわれ教師自らの手で調査し、分析して研究を進める絶好の機会ではなかったかと思われてならない。

全国学力調査が実施された翌年、すなわち昭和32年には、世界にさきがけてソ連が第一回の人工衛星の打ち上げに成功したのである。これは、世界各国に大きな衝撃を与え、科学技術の遅れをとるもどすべく各国が競って科学技術教育の検討を始め、その充実振興に積極的に取り組む動機となった。特に米国などにおいては、巨額の予算を投入して理科教育・数学教育の改善に力を入れるとともに、そ

の他の教科においてもその現代化を図るための組織的計画的な研究や実践活動が進められることになったのである。

わが国においては、昭和32年には理科教育振興法を制定して、その振興に力を入れ、36年には産業教育振興法を制定し、産業教育の充実に努めてきたのである。また、理科教育・技術家庭科教育担当者の研究・研修の場としての理科センターの建設にあたって、補助金制度を設け、科学技術教育の充実、振興を図ってきたのである。

本県は、昭和39年に理科センターを設置して、教育内容・方法の研究、研修を行ない、着実にその実績をあげてきている。

科学技術の進歩に伴い、昭和30年代以降の社会・経済の変化はきわめて急激なものがあつた、その結果、人間と自然の不調和、人間疎外や、連帯意識の衰退、あるいはまた労働力需要の増大による女子の職場進出が、乳幼児や青少年の人間形成に大きな影響を与えているという事実など、われわれの社会生活面において、幾多のひずみを生むにいたつた。これらのひずみが社会問題として取り上げられたその根底には、ひとりひとりの人間の生命を尊び、多面的な人間の価値を認め、その可能性を伸長させ、豊かな明るい社会を築きあげていくという考え方があると思う。

人間形成にかかわりのあるものは、ひとり学校教育のみならず、家庭教育・職場教育・社会教育などがあり、現在あらためて生涯教育という観点に立って、その充実が急がれているが、いちおうこれらはさておき、学校教育ひとつをとりあげても、新たな観点に立って対処していかなければならない問題が山積している。

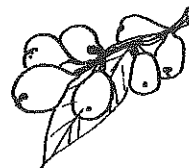
社会の発展は、教科教育における質・量の増加を求めてくるが、しかしわれわれは、その内容をきびしく精選することが肝要であり、その根底には学問の本質に基づく思考力、考察力、創造力の育成を図るという基本的態度がなければならぬ。また、その指導にあたっては教材の分析と配列、適切な機器の位置づけなどを考え、指導法のいっそうの改善くふうが要請される。

さらに、それぞれの学校教育の目標を達成するために学校経営、学級経営のあり方についての検討がなされなければならない。いかなる集団活動が、しつけが、あるいは訓練が、児童・生徒の人間形成にどのような影響を与えるか。今後究明しなければならぬ点も多いが、これらの経営を含めた教育経営の研究が必要である。

また、ひとりひとりの児童・生徒の可能性を伸長し、その特性を生かす教育相談とともに、学校になじまぬ児童、生徒の教育相談は今後ますます重要になってくる。

以上のように学校教育のかかえている問題は、あまりにも困難な問題が多く一学校や一教師のみ力では解決し得ないところまできている。したがって、学者や現場教師、学識経験者等と広く相提携して研究を積みあげ、互いに研修し、実践活動を通してはじめて新しい教育効果が期待できるのである。

明年はセンターの建築にとりかからねばならない。センターの組織・機能を考えるとき、それに託する夢はいよいよ大きくなっていくが、是非とも充実したセンターを実現したいものである。



昭和47年度は

こんな研究を — すすめています —

本県教育研究所はこんなことを
やろうとしている

本年度の事業内容

<次長 宗 正男>

長年の懸案だった教育センターの設立が、いよいよ本決まりとなり、本県教育の飛躍的發展のためにまことに喜びにたえない。

全国でいちばん最後に設立されることになるので、他県の長所を十分に取り入れた最も充実した理想的なセンターづくりに努めなければならない。

ところで、本年度の研究所の事業については、前記のようなセンターづくりの仕事がはいり込んでくるので、これまでの研究所の活動に相当の影響がおよぶと思われるが、現場の先生方の要望にこたえて、できるだけ迷惑をかけないように努めていくつもりである。

教育の殿堂としてのセンターに、研究と研修のきよ(炬)火が間近にとる日を夢みつつ、本年度の当所の事業を紹介したい。

教授組織の改善を試みよう

<担当所員 江 副 三 郎>

昨年、当研究所が実施した「学校経営に関する調査」の中で、現場の先生方の関心がひじょうに高かったのは、小中学校とも「学習指導の改善」であることがわかった。

ところで、「学習指導の改善」は、教える側の教師の問題が大きいことは当然であろう。中でも「指導方式に関する」教授組織の改善は、小学校においてとくに検討を要することからのひとつであろう。なぜならば、ひとりの先生が、多くの教科を、ひとりひとりの子どもの能力に応じて指導する「学級担任制」は、もはや不可能に近いと考えられるからである。

このような観点から、学校の実情に即して、教師の特性をいかし、協力的な指導のくふうすることによって、授業の効果を期待するのぞましい「教授組織」はどうかを研究してみたい。

研究協力委員 野口(循誘小長)、古賀(勸興小長)
信国(勸興小頭)、中柳(嘉瀬小)、藤山(辰小)

学力の調査、分析に関する研究

学業不振児の診断と指導のために

<担当所員 前 間 正 行>

学習指導では、子どもひとりひとりのもっている能力に応じて、学習効果をあげることができている。一般的な知能が高い子どもは学力も高く、知能の低いものは学力は劣るといえる。問題は「知能と学力のずれ」であり、知能は普通以上でありながら、それに応じた学力をあげられない子ども、いわゆる学業不振児であるが、なぜこのような現象があり、何が学習を妨げている原因か、すなわち学習不適応の要因を追求したい。

これまで、知能検査・学力検査を実施し、学力と知能との関係について、集団的にとらえてきたが、本年度は、ひとりひとりの子どもを理解するため、診断テストを作成し知能以外の学力を規定する要因のうち、学力にかかわりをもつものは何か明らかにし、学習指導改善の資料を得たい。

研究協力校 鳥栖小学校

教育のシステム化と
その効果についての実験的研究

<担当所員 田 中 照>

学習指導の効果を高めるには、児童生徒の実態に即して教材の構造化を行ない、教授・学習過程の分析と学習の個別化をはかる方法を考慮することがたいせつである。

この研究は全国共同研究のテーマで、前年度に続いて算数の授業を通して、集団用教育システムの機器を活用し、

1. 学習プログラムの修正と開発
2. OHP, オートスライド, アナライザー, 4チャンネルのテープレコーダの有効な位置づけ
3. 集団学習の中での個別指導のあり方

を実験授業をくり返ししながら、集団記録、個人記録を分析して学習効果にどのような変容があるかを究明しながら修正と検討を行ない、学習指導改善の資料を得たい。

研究協力委員 久池井(付小)、岩崎(有田小)

村井(志道小)、副島(赤松小)、泉(滝野小)

理科学習の現代化に関する研究

教育機器活用の授業のシステム化

<担当所員 古 賀 信 之>

理科教育の現代化では目標、内容、方法の三つの面から考えられるが、本研究では学習指導を中心に教育機器を活用し指導の効果を高めることをねらっている。すなわち従来のような教師ひとりのすばらしい指導力をねらいにするのではなく、学習指導の科学化をねらい、OHP, VTR, アナライザーなどの教育機器を活用して授業のシステム化を究明し、指導法改善の手がかりをつかむことを意図している。

どうかすると教育機器を使うことが教育の現代化のごとく考えられやすいが、子どもが主体的・発見的に学習できるような探究学習の過程を考え、その上に教育機器を位置づける。

そして、学習の効果がどうかを実際に5年生の子どもを統制群、実験群に分けて授業し、その結果を比較してその効果を実証的に明らかにする。

研究協力委員 村岡(赤松小)、池田(本庄小)
松尾(有田小)、本村(東唐津小)

中学生の作文力の伸長に関する研究

<担当所員 庄 島 奎 介>

重要視されていて困難視されている作文指導 — 戦後三回にわたる指導要領の改訂は、しだいに作文指導の比重を多くしてきた。特に今回は、従来の二倍もの時間を示した。しかし、実情は、依然として問題を積み、振わない。

だれでもが、どこでもやれる指導計画はないものか。めあてと力点のはっきりした伸びる指導の方法はないものか。この私の最もほしいものを、さぐりあてるために、国語学会の中学部会のご協力を得ながら努めてみたい。ひとりの教師の篤志的苦行では焼石に水。学校ぐるみの、地域ぐるみの共同研究によって「中学生の作文力」は若々しい芽の伸びを求めたいと思う。遠慮のない注文を。そしてはずんだ声の情報の投げあいをせつにお願いしたい。

研究協力委員 原崎(付中)、清水(七山中)
末次(城西中)、古賀(城北中)

学習の個別化に関する研究

教育機器活用による英語学習指導

<担当所員 岩 永 憲一良>

昨年の研究にひきつづき、学習者の多様性に即して学習を成立させる方法として、一斉指導に教育機器活用による個別学習方式をくみいれて、言語活動を効果的におこなう方法を研究し、学習指導改善の資料を得ることを目的としている。おもな研究内容は次のとおり。

- ① シンクロシートやTEP(0EHP)の自作
- ② 学習指導過程の研究(教育機器の位置づけ)
- ③ 言語活動の指導と評価のあり方
- ④ 授業分析による授業研究、効果の測定等

研究協力委員

中蘭(南波中), 岡(有明中), 中村(背振中)
永益(山代中)

「英語担当教師の音声面の

資質向上に関する研究」

<担当所員 百 武 健次郎>

変わりゆく国際情勢の中で、日本の教育もまたその影響を受けないわけにゆかない。特に今日の英語教育の中で重要視される音声面(聞く、話す)の指導はいかにあるべきか。佐賀県のように、英語を話す外国人がきわめて少なく、native speakersとの接触も皆無に近い状況の中で、英語音声面の指導は強く叫ばなければならない。

本県の英語担当教師の英語教育についての専門的識見を高めると同時に、特に音声面に関する資質向上をはかるための研究をしたい。

今年の計画として、語学演習装置(Language Laboratory)、その他教育機器の設置およびその効果的運用面に関する調査研究をしたい。

教育の爆発時代といわれる今日、世界各国がこぞって、自国の将来を荷負う児童生徒の教育について真剣に取り組んでいるなかで、わが国においてもこのことについて真剣に考える傾向が増大しているのはたいへんよろこばしいことである。学校をとりまく環境の中で学校教育に対するいろいろな意見や要求が強くなってきたこと

とは、もはや昔のままの感覚で教育を営むことはできなくなったことを意味するものである。産業界や経済界においてはその人材教育を徹底的に再教育していることを見聞するにつけて教育界のみが自己の研修と経験から割り出した指導観のみで教育をすることはもはや許されないところまできていると思われる。この意味において教師の現代化をはからなければ教育の現代化もないであろう。3年前欧米教育事情の視察に派遣していただいたとき、海外にいてわが国の教育そのものにあまりにもイミテーションが多いことに気づいた。

これからの教育はいままでのように諸外国のイミテーションから脱却して、もっとも日本人にあった教育観なり、教育観なり、教育システム、教育内容を創造した教育を確立しなければならないことを痛感した。経済界や産業界がいち早くあらゆる面で現代化をはかっているのに比して、教育界の現代化は相当おくれしている。むしろ学校教育が現代化を急ぎ現代化された教育の中で育ち、教育を受けた生徒が将来の経済界や産業界にならっていくときにはじめて学校教育の重要性が再認識されるであろう。今の子どもに創造性や自主性が培われていないことや、強い意志力、根性や実践力のないこと

がしばしば指摘されるたびに教育者としてはまことに残念なことである。このような教育のおくれをとりもどし社会の進展にマッチした人材教育をするために今日の教育課程の改善となったものと思われるが、改善の基本方針が教育内容の現代化そのものであって、内容を基本的・基礎的事項に精選し、集約することと児童生徒の個性、能力や進

路、特性に対応することにその特質がうかがわれる。ドイツに行ったときその国の『大臣に面接する機会があり、彼は「人間は教育によってだけ人間になることができ、人間は人間によってのみ教育される」というカントの教育哲学を引用し、ドイツが15年前に教育機器を投入したが、

教員や教材のみを導入しても、教師の創意がなければ、そして教育を近代化しなければ教育効果をあげることはできないと強調されたが、このことを逆説でとらえれば教育機器の導入により、金を投じさえすれば教育効果をあげ、教育を現代化したことにはならない。教育機器については子どもに自主的・創造的・探究的な思考力や実践力を身につけさせ「人間性豊かな生活」を育てるための指導法の改善のために教材教具を導入する必要があるという考え方でなければならぬ。生徒ひとりひとりの能力に応じた教育の充実が強調されその学力を高めようとするならば、その目的達成のためにいろいろと工夫がなされなければならない。「人間は教育によってのみ人間になることができ、人間は人間によってのみ教育される」というカントの哲学はそれとして現代化のためにあらゆる教育の場に教育の機器を導入し、それと取り組むことに億病であってはならないが、この種の研究は、まだまだ教育現場ではおこなわれているわけ

現場の実践をとおして、願わくば教育研究機関との密接な連携により教育の現代化がはかられるように強く望むものである。教育界には企業努力がたりないと批判されるのも経済界や産業界と比較されてのことであり、この一局面を見ても今後の発展が望まれる。現代の社会に対応する学力を身につけ、知情意一体の人間形成が必要とされている今日では、そのことが早急に改善されなければならない。

教育現場と学校教育の現代化に思うこと

伊万里中学校 島山孝郎





昭和47年度

教育評価研修会案内

——夏期休暇中に—— <所員 香月和男>

1 研修会の継続を望む声にこたえて

当研究所では、教育評価に関する専門的知識と技術の修得を目的とした<教育評価研修会>を、過去4年間実施してきたが、さきに報告した所報第14号のアンケート調査結果にも見られるとおり、非常に好評であつて、この研修会の継続を望む声もまた強いものがあつた。昨年度の受講者の生の声をつたえるところである。

その1、「どの内容もたいへん勉強になった。来年も、ぜひ、この評価研修会をつづけてください。」(小学校 女 54才)

その2、「有意義に聞かせていただきましたので、こんごは現場で活用していきたい。できれば来年は教育機器利用における評価のしかたについての話がききたいものです。」(中学校 男 29才)

その3、「子供たちのテストを評価したら、すぐ返さねばいけないなど、私たちが、日頃、あまりにもいいかげんに行っていることがらを指摘され、心が一新させられました。深く反省して、こどもひとりひとりを大切に、よい教師にならなければならないと思います。こどもたちにとり、教師は、その環境の中でも重要なポイントであることを、あらためて考えさせられました。・・・」(小学校 女 31才)

教育センター建設に伴う業務をかかえこんでいる折りではあるが、以上のような<評価研修会>継続の強い要望にこたえて、今年も実施することになった。

2 今年の教育評価研修会のあらまし

評価研修会の日時、場所および研修内容は、つぎのとおりである。

(1) 日時

例年のとおり夏期休暇中の2日間を予定しているが、詳細は期日確定後(6月中旬頃)にご案内する。

(2) 場所

例年のとおり、佐賀、武雄、唐津の三会場を予定している。

(3) おもな研修内容

① テスト結果の処理と解釈

昨年、「むずかしいが、たいへん有益でした。来年もとりあげてほしい・・・」という声も、もつとも高かった内容で、データのもつている情報を浮彫りにする統計的手法の習得が中心になる。ここで、とりあげる内容は、

- 度数分布表、グラフ
- 代表値、散布度(標準偏差)
- 相対的位置の表わし方(順位、パーセンタイル、z得点、t得点)

○ プロフィール分析

○ スケジュール(問題の妥当性の検討)などである。

② 問題のつくり方

"A poor question makes a poor answer." (つまらない質問は、つまらない答しか引き出せない)とは、よくいわれることであるが、問題作成の巧拙によって、生徒の学力が高くも低くも評価されるという点についての反省が、先生がたの間で、意外に少ないように思える。ここでは、つぎのものをとりあげる予定である。

- 理解をみる問題のつくり方
- 知識をみる問題のつくり方
- 思考力をみる問題のつくり方
- 技能をみる問題のつくり方と評定のしかた
- 態度的学力をみる問題のつくり方と評定のしかた

③ 各種検査とその利用

こどもの能力や個性に応じて、その可能性を全面的に発達させるのが、教育の本質だといわれる。ことばとしていうのはやさしいが、本当に、こどもを正しく理解しその可能性をつかむためには、教師は、こどもの知能、性格、ならびに学力を測る各種の検査と、その利用のしかたについての知識をもつことが必要になる。そういう観点から、ここでとりあげるものは

- 知能検査
- 学力検査
- 知能と学力の相関
- 学習適応性検査(学業不振児の要因分析)
- 性格検査(問題児の早期発見)
- 各種検査の組合せによる生徒理解

などにならう。

④ 教育工学

教室に、機器を導入したという理由だけで、教育効果が上っているのだと思いきむほど、危険な幻想はない。そこで、ここでは、教育工学の正しい理解と適切な利用法に関する内容のものがとりあげられる。

- すなわち、
- 教育工学とは
 - 教育工学による授業の改善
 - 学習指導案(学習プログラム)の作成
 - 教育機器の利用、TPのつくり方

3 研修会に参加を

今年の<教育評価研修会>のあらまきは、前述のとおりであるが、日々の実践を通じて、教育のむずかしさを体験されている先生がたなら、この<研修会>から、必ずや貴重なヒントのいくつかを引き出されるだらうと確信します。当研究所では、内容もできるだけ具体的事例をもちこんだ現場向けの構成とし、かつ、中卒程度の数学で十分理解できるよう、気をくばって準備する予定ですので、数に弱い先生がたも、億せず、ご参加ください。

<研究紀要64号>

現代の子どもの集団所属意識に関する
比較研究

<次長 宗 正男>

— 第一次報告 —

28年間にわたる孤独な生活を続けた横井庄一さんは例外として、わたしたちは、何らかの意味で「集団」(社会)とのつながりを持ち有形無形の影響を受けている。この個人と集団のかかわりあい方の実態を分析的にとらえようとするのがこの研究のねらいである。

調査研究の主な内容は、子どもが現在所属しているいろいろの集団(社会、— 家庭・学級・学校・市町村・近隣・県・国家)に対して、情緒的な好嫌感情、集団への関心の度合、規則についての意識や集団への帰属意識などを視点としてとらえている。小6年、中2年、高2年を対象とし約3千名に対して実施している。

調査結果の処理は、今年度も継続して行なわれるが、集計結果は

- 1) 調査問題別の全体集計表(全般的な意識実態の傾向を知るもの)
- 2) 関連タイプ別の集計表(集団に対する帰属意識を柱として、好嫌、悪口、関心度項目に対する反応を関連の立体的にとらえるもの)

にまとめられている。
今回の第一次報告書は、この研究の趣旨と調査計画(目的・内容・方法)ならびに集計表を記載している。調査結果についてのくわしい考察は第二次報告書を待たなければならぬが、数表そのものからでも子どもの集団所属意識の傾向と重要な教育的な問題が発見できるようにである。その考察の観点は、

- 1) 小・中・高で発達の差がどのようにあらわれているか。
- 2) 男女の性差はどうだろうか。
- 3) 四地域(都市化のいちぢるしい地域、普通都市、過疎化のいちぢるしい地域、普通農村)の間に差異が認められるだろうか。

などである。
なお、この研究は、全国教育研究所連盟の共同研究の一環として実施されているものであり、昭和48年度までの継続研究である。

<研究紀要60号>

学校経営に関する研究

佐城指導主事(前所員) 中島範三

佐賀県下の小・中学校における学校経営の実態をとらえ、そこから本県の学校経営上の問題点を握し、改善の方向を探るために、県内の小中学校274校の校長ならびに200名の先生方を対象に、「学校経営に関する調査」として、昭和45年・46年と2か年にわたり現場の実態を調査し、さらに面接調査を加えたものである。特に

- ・ 県下の先生方がどんな点に困難を感じていられるのか。
- ・ 職員会議に対しどのような考え方もつていられるのか。
- ・ どのようなことを研修したいと願っていられるのか。
- ・ どのようなことについて指導助言を求めようとしていられるのか。
- ・ 学校評価の実態はどうか。

以上の項目を中心に、学校別、男女別、職別とまた項目によっては規模別、年令別に調査検討を加え、その問題点

や、改善の方向に示唆を与えたものである。表題が「学校経営に関する研究」となっているので、管理者対照の研究紀要にとられがちと思われるが、全職員を対照としたもので、管理者である校長、教頭はもちろんのこと、全職員が見守るべき研究紀要ではあるまいか。

<研究紀要61号>

国語科学習指導の近代化に関する研究

— 教育機器活用による説明文の読解指導 —

学校教育課指導主事(前所員) 前田和茂

今日、社会や文化の急速な発達と変化に伴い、教育をめぐる近代化ないし現代化の動きは、「論」においても、「実践」においても教育における重大な課題である。

本研究では、論としては国語教育における近代化とは何か、ということから論を起し、国語教育近代化の方向、教育機器と国語教育近代化との関係、説明文の読解指導における教育機器の機能について述べている。そのめざすところは、要するに、いかにして、学習の効率化を図るか、ひとりひとりに学習を成立させるか、学習意欲を高めるか、教師と学習者との人格的接触を強化するか、ということである。

実践では、小学校6年、説明文の読解指導について、教育機器を取り入れた学習指導を試み、教育機器活用の方法と、その効果を明らかにしている。方法としては、オーバーヘッドプロジェクター、アナライザー、シンクロフックスを使用機器とし、機器を活用する組と、使わない組の



両群について実験的授業を行ない、その結果を比べるとい、いわゆる二群比較法によっている。

国語科における教育機器活用の研究は各地で試みられているが、多くは言語の基礎的な練習やドリル面での活用を手がけたもので、読解指導に教育機器を導入した例は少ない。この研究で試案された読解指導での教育機器活用の学習プログラムや教材の試作は、今後、国語科における教育機器活用についての研究に、参考になる点があろう。

<研究紀要61号>

教育機器活用による学習指導の

改善に関する研究(算数)

<所員 田中 照>

- 1. 赤松小学校に貸与している教育機器はどんなものか、集団用教育システムといわれるもので、情報提示には、オートスライド、OHP、4チャンネルのテープレコーダを使用し、反応結果は45人分がひと目でわかるアナライザーがあり、記録は個人と集団の両方とれる記録器を接続している。

- 2. 算数教育と教育機器の利用
数学的な考え方を育てるにはどうしたらよいか
○柔軟な頭の条件、○概念形成の過程、○統合的発展的な考え、○算数科の目標にそつた教育機器の利用について文献を参考に集録している。

- 3. 実験授業をどう進めたか
○指導内容、6年算数、式の研究、 $a \times b = c$ で表される。
○授業方法、問題およびフィードバック情報をすべて4チャンネルのテープレコーダに吹込み、半自動教育システムによる進行。
○結果の考察

- ① イヤホンを通じて音声流れるため注意力が集中する。
 - ② 集団の中での学習意識より、個別学習の意識が強い。
 - ③ 理解力、および問題解決力ともによい傾向を示した。
4. 意識調査、教育機器利用に子どもは高い興味と関心をもっている。以上の内容について、学習プログラムと実験データを集録している。

<研究紀要61号>

教育機器活用による学習指導の改善 (理科)

<所員 古 賀 信 之>

わらいは・・・①従来の一斉指導で優秀児の思考が中心に先行していた学習を、アナライザーにより中位以下の子どもの思考をもり上げつつ問題意識や学習意欲を高める。

②OHPにより問題の提示を効率的にし、フィードバックにおいて理解の定着を高める。

方法は・・・等質と思われる2クラスを教育機器を使った実験群、そうでない統制群に分け、同じ流し方で同一の教師が実験授業をし効果を比較してみた。

学習プログラムは・・・(紀要にくわしく記載)

効果の判定は・・・実験授業前にやった両群の事前テストの差異と授業後の事後テストの差異との比較によりみた。

全国水準との比較の上から明らかにし、それに関する知的能力因子を解明し、理科の学力を高めるための資料を得ようとしたもので、46年度は、研究の基礎段階として、小学5年を対象に、つぎの項目について調査し、子どもの実態をとらえた。

1. 知能と学力

理科学力は、診断的学力検査を用いた。

知能は、教研式、学年別知能検査を用いた。

以上検査の結果をもとにして学力や知能の分布状態や学力と知能との関係について、男子と女子の間に差があるかどうか、学力上位群と下位群の子どもはどんな傾向をもっているか、全国水準と比較しながら考察した。

2. 学力と学習適性

学力を規定する要因としては、知能だけでなく、知能以外の要因も大いにはたらくていると見なければならぬ。

ここでは、学力成就のうえに学習適応性がどのように影響するかを調べるとともに、対象児の特質を適応の面から考察するために、学習適応性検査(AAI)を用いた。

3. 各教科に対する子どものかまえ(好き、きらい)

<研究紀要62号>

学習の個別化に関する研究

～ 教育機器活用による英語学習指導 ～

<所員 岩 永 憲一良>

できる子とできない子の差が大きくて困る

これはよく耳にすることばで、私たち英語教師にとって切実な問題である。この研究は、この悩み解決のひとつの試みとして、教育機器活用による学習の個別化、効率化をはかる方法について研究したものである。おもな内容は次のとおり。

- ① 佐賀県の中学、高校において、英語科として利用できる機器はどんなものがどの程度利用されているか。またそれらは、英語の学習指導にどの程度利用されているか。
- ② シンクロファックス活用による英語学習指導
 - ⑦ 教科書の内容に即して、主としてHearing speaking readingの力を高めるために、内容の程度をかえて、2種類のシートを自作する。
 - ⑧ 機器活用の学習指導の展開と効果について
 - ⑨ 機器利用学習についての生徒の意識調査
- ③ OHPとアンケート方式(生徒の理解度を記録しながら授業をすすめる)を組合わせた授業の実践と反省
- ④ OHPとアナライザーを組合わせた授業のこころみと反省
- ⑤ その他
 - 英語学習意欲のとらえ方、教育機器活用による学習指導の留意点と問題点(今後の課題)等

要の紹介

結果は・・・その一部を紹介すると次の通り

		平均	標準偏差	有効度数		有効度指数平均			
統制群	事前	4.94	1.12	60.4%		統制群	実験群	差	
	事後	8.06	1.63			知識	75.4%	86.0%	8.6%
実験群	事前	5.04	1.15	70.3%		理解	57.8	72.1	14.3
	事後	8.86	1.03			技能	47.4	64.0	16.6

この表から考えられることは、機器を使う		統 制 群			実 験 群		
		事前	事後	差	事前	事後	差
	上位群	56.5	93.5	37.0	57.0	89.5	32.5
	中位群	47.0	46.5	29.5	52.0	89.0	37.0
	下位群	43.0	73.5	30.5	42.5	91.5	39.0

た学習指導に効果があるということ。その内容として観点別では理解、技能の面についての効果があり、教育機器の利用は中位以下の子どもに効果が大きいとみられる。

<研究紀要63号>

学力の調査、分析に関する研究

-理科学力を中心に-<所員 前 間 正 行>

子どもの学力を伸ばすためには、子どもについて正しく理解することである。また、学級の指導を能率的に行なうためには、学級の状態について正しい理解をもたなければならぬ。そのためには、子どもの実態や学級の状態についていろいろな資料を集め分析する必要がある。

この研究では、小学校児童の理科における学力の実態を

